

10. 加藤清正復活の背景

加藤家改易後新しく領主となった前豊前小倉藩主細川忠利は、清正の位牌を掲げて熊本城に入城し、清正に敬意を表したと言います。忠利の父の忠興と清正は、豊臣政権を支えた武将であり、七将襲撃事件も共にした仲です。忠利にとっては、大先輩でしたから、心から出た行動だったでしょう。しかし、領主が変われば民心も領主になびき、旧領主は忘れられていくのが世の常です。また領主も自己の権威を高めるため、旧領主の影響を消し去ろうとします。従って、加藤家改易以降、清正の存在も徐々に忘れられて行ったと思われまゝ。そして、普通なら再浮上することはないものです。しかし、加藤清正の名は、死後100年余りたって復活するのです。

(1) 清正長女あま姫の血筋は幕府要職へ

その間も清正の血を引く子孫が幕府要職で活躍しています。それは、清正の長女あま姫の血筋の子供たちです。あま姫は最初徳川四天王の1人館林藩主榊原康政の嫡男康勝に嫁ぎますが、康勝は大坂の陣での負傷が原因で、1615年に死去します。その後あま姫は肥後藩江戸屋敷に戻っていますが、幕府の世話により徳川譜代大名で將軍秀忠側近の大坂城代阿部正次の嫡男阿部正澄に嫁ぎます。これにより、この頃加藤家は、徳川家の姻戚大名(次女八十姫は家康十男頼直と婚約)として幕府から大事にされていたことが分かります。正澄は家督相続前に亡くなり、阿部家の家督は正澄の弟の重次に移りますが、正澄とあま姫の間に生まれた嫡男正能(まさよし)は、分家で当時の幕府老中阿部忠秋の養子となり、忍藩を相続します。そして阿部忠秋家で正能以下直系の正武、正喬(まさたか)が幕府老中に就任します。このように、清正亡きあと清正の子孫は、幕府の要職に就いていたのです。

(2) あま姫血筋と八十姫孫の運命のめぐり逢い

そして、1716年第8代將軍に八十姫の孫に当たる第5代紀州藩主徳川吉宗が就任したときに、正喬が幕府老中を勤めていたことが清正の復活につながったと考えられます。吉宗は、將軍就任後、細川藩を通して清正の記録や遺品を取り寄せ、閲読・閲覧しています。吉宗は、祖母八十姫の死後生まれていますので、八十姫とは面識がなく、加藤家も改易になったことから、外曾祖父清正についてはほとんど知らなかったと思われまゝ。なのに將軍就任後突然興味を持ち始めたということは、正喬から同じ清正血筋であることを聞いたからとしか考えられません。正喬(46歳)は翌年老中を辞職していますが、これは、老中は譜代から就任するもので親藩(將軍血筋)からは就任しないという慣習があったためと思われまゝ。正喬には子供がなく、阿部家から清正血筋は途絶えますが、吉宗の血筋の將軍が14代まで続いたため、將軍家姻戚としての清正の地位は、江戸末期まで落ちることはありませんでした。

(3) 清正を忠義の武士の代表に祭り上げたのは松平定信

熊本城の本丸御殿に清正が作った昭君之間という格式の高い謁見の間がありますが、この部屋を「豊臣恩顧の大名であった清正が、豊臣秀頼を迎え、徳川幕府と戦うための部屋」

と言う説は、江戸時代からの庶民の伝承を明治以降書き留めた文書を根拠にしているようですが、十九世紀前半に書かれた広瀬蒙斎の紀行文「有方録」にも、「加藤清正は、熊本城に秀頼を迎えて江戸幕府と戦う計画だった」とあります。

広瀬蒙斎は、陸奥白河藩主で幕府老中として寛政の改革を主導した松平定信に重用された儒学者で、白河藩の藩校立教館の学頭や教授を務めた人物です。松平定信は、吉宗の孫であり、清正を現在まで続く「豊臣恩顧の大名＝忠義の武士」に祭り上げた張本人と思われま。定信の話を書き留めた「明君白川夜話」にも定信が清正を賞賛した話がかかれています。蒙斎は、清正の時代を生きておらず、清正が昭君之間を作った意図など知る由もなかったはず。この蒙斎の見解は、蒙斎が肥後を旅したときに熊本城下で聞いた話を書いたもので、それ以上の根拠はないと思われま。蒙斎の狙いは、江戸幕府、特に定信が強く推し進めた儒学教育において、武士に最も大切とされる主君への忠義を体現した人物として、定信が尊敬する清正を位置付けることにあったと思われま。清正は、徳川幕府が成立した後も豊臣家への忠義を忘れず、命を賭けて旧主君の子秀頼を守ろうとした（儒学に言う六尺の孤）と設定し、清正を徳川幕府が求める忠義の武士の代表に祭り上げようとしたと考えられま。

（4）清正復活の裏に阿部忠秋の存在

清正復活に重要な役割を果たしたのは、幕府老中阿部忠秋の存在です。忠秋は、清正長女あま姫が嫁いだ阿部正次家の分家筋で、第3代将軍家光の側近であり、1633年から1666年まで33年間幕府老中を務めています。歴史上はあまり有名ではありませんが、剛毅朴訥ながら見識と政治手腕に優れ、徳川幕府安定の基盤を作った1人と言われている。特に人徳に優れ、たくさんの捨て子を拾っては育て、男は自らの家臣にしたと言います。忠秋の重臣が、きりがないのでやめるよう諫言したところ、「親が子を捨てるのはよっぽどのことで、政治が及ばないためだ。これは幕府の要職にある者の当然の務めである。」と述べ、やめなかったと言います。

忠秋は、加藤家改易直後の1633年に老中に就任していますが、加藤家改易問題の発端となった光正の某書が幕府に持ち込まれたとき窓口となった職奉行を勤めていましたので、加藤家改易事件にも深く関係していました。1632年に加藤忠廣が出羽丸岡に配流になり1653年に死去した際、忠秋は検使を派遣し、忠廣の棺の中に収められていた清正の遺品まで回収し江戸へ持ち帰ったと言います。忠廣には、改易処分に伴い信濃国松代城主真田信之（その後上野国沼田城主真田信吉）に預けられた側室と男女各1名の子があり、そのうち娘（亀姫）だけが生存していましたが、預り処分中であり相続は難しい状況でした。忠秋は、忠廣死去の前年に、阿部本家の阿部正澄と清正の長女あま姫の間に生まれた子正能を養子にしていますが、これは、忠廣の死期が近いことを聞き、行き場を失うかもしれない清正の遺品を相続させる受け皿を作ろうとした、とも考えられま。その後、出家していた清正の正室清浄院やその娘で紀州藩主徳川頼宣の正室八十姫などの働きかけにより亀姫への相続が許され、1657年には預り処分も解かれます。それにより亀姫は、紀州藩重臣渡邊直綱の養女となった後、幕府旗本阿部四郎五郎正之の5男阿部政重に嫁ぎま。忠廣が丸岡に

持参した以外の清正の遺品や遺産は、加藤家改易時に正室清浄院や元肥後藩家老加藤平左衛門が持ち出し、清浄院の隠遁先の京都本圀寺境内に蔵を建て保管しており、亀姫が阿部家へ嫁ぐ前、それらは一旦紀州徳川家へ引き渡した後、紀州徳川家から阿部家へ引き渡され、その後片鎌鍬、朝鮮虎の頭蓋骨などは、阿部家から紀州徳川家に献上されたと言われています（片鎌鍬は現在東京国立博物館所蔵）。清正の血族である阿部正能にも遺品の分与を受ける資格はあったと思われませんが、養父忠秋の性格からすると、すべて辞退したのではないのでしょうか。

阿部正之は、阿部忠秋と同じ阿部一族で、忠廣が肥後藩主時代、肥後藩が豊臣方加担を疑われ大坂の役への出陣留め置きになった際に、幕府の目付役として肥後藩に派遣されていました。忠秋および正之にとって、加藤家はとても縁があったようです。特に阿部忠秋がいなければ、吉宗と正喬が会うことはなく、清正復活はなかったと思われます。また、阿部忠秋の後ろには、同じ親戚筋にあたる紀州藩主徳川頼宣がいたことも重要です。